

練馬区立美術館および練馬区立貫井図書館改築等基本設計候補者選定委員会 講評

本プロポーザルは、美術館再整備基本構想、これからの図書館構想において目指す新たな美術館および貫井図書館を創造することができる設計者を選考するために、次の3つの課題を設定し、広く提案を求めた。

課題	内容
【課題1】まちと一体となった美術館	美術の森緑地と商店街・駅へと続く動線の一体化、美術館を核とした駅周辺の街並みの創出を踏まえての建物・緑地の機能・意匠など。
【課題2】コンセプトを実現する空間づくり、融合による相乗効果	美術館・貫井図書館それぞれの基本構想等のコンセプトを実現する空間づくり、機能、融合による相乗効果など。
【課題3】施設運営や利用者の視点に立った工夫	イニシャルコスト、ランニングコストの抑制、脱炭素や持続可能な社会へ貢献できる環境への配慮、ユニバーサルデザインなど、建設、運営、施設利用など様々な場面を見据えた工夫、機能、具体的効果など。

二次審査に残った6者の提案については、どれも新しい時代を先取りするような優れたものであり、公開で行ったプレゼンテーション・ヒアリングもそれぞれ提案内容を深める有意義なものであった。それらについて評価基準に基づき、課題に対する解釈はもとより、練馬という地域特性をどのように読み込み、未来への可能性をどのように実現し得るのかについて評価を行った。特に議論が分かれたのは課題1「まちと一体となった美術館」についての解釈で、地上部の建物のボリュームを小さくし、様々な機能を地下に埋めることで、周辺との景観や活動に連続性や一体感を持たせようとする提案と、逆に練馬からの発信というコンテクストで地上部分を目立つ建物としてその存在をよりアートに近づける提案と、二つのグループが審査員の支持を二分した。それぞれの設計者の理念や練馬区、中村橋というまちに対する解釈が顕著に表れている点で提案者の努力にエールを送りたい。議論は、美術館と図書館、緑地との関係性やアートに対する考え方などに及び、実施方針や実績などを含めて総合評価を行った。各案についての講評は以下のとおりである。

・設計候補者 株式会社平田晃久建築設計事務所

練馬の遺産ともいえるべき富士塚に想を得た構築的な提案で、大きな構想力を持ち、練馬の文化的文脈を一気にグローバルに展開し得るポテンシャルをもった案である。全体のフォルムにはまだ推敲の余地があるが、ローカルな人たちにとっても、インバウンドの人たちにとっても、建築的に新しい名所を提供する可能性を持って

いる。

建築の中央部分に収蔵庫などのコアを置き、その周辺に開放的な中間領域となる空間をつくることで、調和させようとしている。中間領域の部分を立体化することで、公園での人々の活動が建築の外周を経てシームレスに繋がっていく。提案された多重構造に対してどう合理的な解を与えるか、まだ未確定の部分も少なくないが、今日の構造技術をもってすれば今後の作業次第で新たな空間システムづくりに繋がると期待される。美術館と図書館の融合についても様々な形で展開できる余地があり、伸びしろがある。

・次点候補者 西澤・畝森設計共同体

大小様々なボリュームの箱を組み合わせ、一見複雑なつくりに見えるが、建物全体を南北に貫くRC造コアフレーム（キール）が建物全体のコアとなって美術館・図書館をつないでおり、詰込み型の箱物ではない。美術館と図書館を融合させ、アートに対して親しみを抱くような動線計画を担保して、きめ細やかなプログラムの組み立てを行っており、プロポーザルへの深い理解が汲み取れた。

この小さなスケールが緑地のスケールとも合っていて、「つちの広場」が緑地との新しいつながりになりそうな期待が持てる一方で、半地下である必然性や、ピロティ形式で地上部と分断され連続性がないことなど、管理上、利用上の課題も見受けられた。

(以下、プレゼンテーション順)

・株式会社山本理顕設計工場

中村橋一帯の土地のコンテクストを読み込み、周辺の住宅地のスケールをそのまま美術館に適用している点が特徴である。大空間を必要とする展示室などの美術館部分を地下に埋め、地上部分はボリュームを抑えた小パビリオン群の間に路地が展開する点でやや意表を突いた案となっている。大型施設然とした美術館に異を唱えた提案として今日の潮流に合致し、地元の人々がまちなかで普段着で活動できるという点が評価される一方、美術館と図書館をどのように融合させるかをめぐってもの足りなさが指摘された。

・有限会社阪根宏彦計画設計事務所

全体を格子状（グリッド）にした立体格子の構成としたオーソドックスかつ効率の良いプランとなっている。特徴的なのは、今回の全提案者の中で唯一木質空間を前面に出し、脱炭素的な主張をクリアに出している点である。建築の果たすべき環境的使命という観点からこの提案は期待されたが、ヒアリングを通して建築全体として美術館・図書館のプログラムをどのように考慮したのかが見受けられなかった。

- ・株式会社高橋一平建築事務所

真ん中にハードコア（美術館）を置いて、周りがコリドー（回廊）になっており、建築としては単純かつ斬新である。こうした美術館の例は他に見当たらず、独創的で非常に可能性のある発想と評価された。その一方で、この内容を実現していく手立てについての解答が曖昧で、特に外装をかたちづくる「膜」についての技術的な提案が不鮮明であった。また図書館を回廊部分の本棚に要約して、それを今日の流行にならってファサード化、ファッション化しているため、図書館本来の機能、今ある貫井図書館の利用者が求めるであろう図書館像にどう応えるがもう少し欲しかった。

- ・株式会社藤本壮介建築設計事務所

美術館の主たる展示機能を地下に収めて全体を低層にし、高層部分には収蔵庫を集約させることで、美術館の諸機能を上下に巧みに配した注目すべき案である。近隣への日照を配慮するとともに、限られた敷地の中で緑地と建築との一体化を図っており、強く主張しない節度の取れた建築で、その点も評価の対象となった。緑地が建物屋根まで連続しているのはインパクトがあり、全体的にもバランスがとれている。その一方で、まちとの一体性が緑地に集約され、プログラム上での地域との関わりや美術館・図書館の融合などの点においてやや工夫が見られなかった。

・株式会社平田晃久建築設計事務所（本事業の受託事業者）の提案書は、区ホームページにてご覧になれます。

<https://www.city.nerima.tokyo.jp/jigyoshamuke/jigyosha/oshirase/bijutsukanproposal.html>

・本事業の受託者以外のプロポーザルにおける提案書については、練馬区情報公開条例第7条第2号により非公開となります。